

## カジメの変身

高 光敏<sup>※</sup>

カジメは済州島の漸深帯で育つ（写真1）。収穫期は夏である。カジメはアワビとサザエ（クジェンギ）の餌となり、ヨードカリが多く含まれている。ヨードカリが多いという点がカジメの変身の要因でもある。ヨードカリは陣痛や消炎などに使われる外用薬であるヨードチンキの原料であると同時に火薬の原料にもなる。カジメにヨードカリが多く含まれているため、最近では済州産カジメによる天然新薬の開発の可能性が高いという。日帝強占期には様々なところでこのカジメが使用された。

日本陸・海軍省は1900年代の初め頃までヨーロッパから硝酸カリウムを輸入していた。日本の商船はヨーロッパから日本へ硝酸カリウムを輸送した。しかし、1904年に露日戦争が勃発すると、ロシアの艦隊が太平洋と

インド洋で日本商船の硝酸カリウム輸送を遮断した。そのため硝酸カリウムの輸入が途絶えた。硝酸カリウムの不足現象は太平洋戦争が終るまで続いた。日本陸・海軍省は硝酸カリウムの代わりにヨードカリを得ようとした。

日本陸・海軍省の政策は済州島のカジメの採取に拍車をかけた。日本陸・海軍省が必要とするヨードカリは1年に6～7万ポンドである。その内、済州島のカジメから1万ポンドのヨードカリを確保した。（高橋昇『朝鮮半島の農法と農民』1998年）<sup>1</sup>。

済州島の海女は日本陸・海軍省が必要とするカジメ（または、昆布）生産の先鋒に立った。済州島の海女はカジメと昆布を採取するために韓半島、日本列島、ロシア、そして中国にまで進出した。『韓国水産誌』（朝鮮総督府農工商部 1910年）には、済州島のカジメについて次のような記録がある。

昔から済州島の人々はカジメを採取しなかった。日本人が購入することになって、これを採取するに至った。城山浦（ソンサンポ）に韓国物産会社が設立されヨード製造業が開始された。その当時、牧使に依頼し訓令を下して、カジメ採取を奨励した結果、その採取が大きく伸びたのである。



写真1 海の中のカジメ（撮影：済州道民日報チヨ・ソンイク記者）

※韓国・木浦大学校島嶼文化研究院研究員

昔から済州島の人々がカジメを採取しなかったわけではない。済州島の人々は風浪に浜辺まで押し流されてきたカジメの山を採取して肥料として利用していた。ここでいう「カジメを採取しなかった」ということは海女が水の中に入ってカジメを取らなかったということである。1905年頃に城山浦に入った韓国物産会社はいわゆる「カジメ工場」であった。そのときから済州島の海女はムルジル（물질 海に潜る）としてカジメを採るようになった。

1916年に日本人である小金丸汎愛が発表した「海藻生産調査」（『朝鮮叢報』12月号、p136）には、済州島海女のカジメ採取の様子が具体的に描かれている。その内容は次のようである。

済州島沿岸の漁業権は該当村の人々にある。村の海女は海に泳いでいきカジメを採る。海女は約4メートルから10メートルまで水中に潜って採る。優良なカジメは水深12～13メートルまで潜って採る。1隻の筏（筆者：筏船）に男1人、海女2～3人が同乗する。男は船の進退を調節する。海女たちは「マンサリ」（망사리・採取物を入れる網）の付いた「テワク」（테왁・ウキ）をつき、水鏡（水中眼鏡）をかけて潜る。「チャンゲホミ」（장게호미・棒に鎌を結びつけたもの）でカジメを採り、これを筏にのせる。船がカジメでいっぱいになると陸に運んで干す。筏船はむろん、風船でもカジメを取る。一人の海女の採取量は1ヶ月に約100貫程度である。

『未開の宝庫済州島』（全羅南道済州島庁、1924年）では、済州島海女たちのカジメ採取が最も盛んに行われた1916年と1917年の済州

島の経済状況に対して次のように言及している（大意を記す）。

1916年、ヨーロッパ大戦（第1次世界大戦）のおかげで今まで肥料としてしか使われなかったカジメの相場はますます上昇し、搬出額は10数万円を上回った。さらに前年度の麦・粟の作況も食べ残るくらい豊作だったので、乞食の姿はまったく見られない。

1917年も徐々に景気が良くなり、済州島では新年に入ってからカジメ相場がより一層上昇してますます好景気になった。

その当時、済州島のカジメは済州島民の主要産業の位置を占めていた。済州島の海女たちはカジメをどのように採り、どのようにに製造したのだろうか。

〔事例1〕城山邑吾照里玄金蘭氏（1932年生、女）

筏一隻に男の船頭1人と海女2人が同乗して甘苔を採った。海女は潜水して鎌でカジメを取る。そして船頭はカジメを船にのせて陸地まで運んで干す。筏の取り分としてハンギッ（한깃、船頭の取り分としてハンギッ、海女の取り分としてハンギッ、各々ハンギッずつ分けた）。

〔事例2〕城山邑新豊里高子権氏（1923年生、男）

筏に乗ることが出来なかった海女は個人的に潜水してカジメを採った。

〔事例3〕城山邑城山里金昌松氏（1917年生、男）

風浪に浜辺まで押し流されてきた海藻を風苔という（写真2）。風苔の中にはカジメも混ざっている。この村はさらに4つの村に分けられる。風苔を採取する浜辺も4つに分けられる。風苔を採取する区域は固定している。村ごとに「所任」という風苔を取り扱う責任者を置く。「所任」は風の方向を予測して浜辺を調べる。「所任」は1人で、各家順番に廻ってくる。その日、採取した風苔はその場で分ける。各家の持分として各々ハンギッ、「所任」の分としてハンギッを渡した。

〔事例4〕旧左邑下道里金利善氏（1917年生、女）

カジメを平らな岩や白砂浜に広げて干す。干したカジメを一ヶ所に集めて燃やす。カジメを燃やすと自然に穴が



写真2 カジメ拾い（撮影：撮影高光敏、安徳面大坪里、1998年6月26日）

※ある女性がこの村の「大国」という浜辺に押し寄せてくるカジメを拾っている。このように採取したカジメは個人所有のものになる。

できる。その穴に干した甘苔を無理やりに入れる。カジメの灰は互いに絡んで凝固する。カジメの煙は有毒である。カジメの煙が粟畑に飛んで行くと、粟の新芽は枯れてしまう。このような様子を「粟にシミができた」という。するとカジメを燃やす人と畑の持主の間に争いも起きる。そのため、風の方向も計りながらカジメを燃やさなければならなかった。

〔事例5〕旧左邑下道里康姫烈氏（1925年生、女）

太平洋戦争（1941～1945年）が真っ最中の時、カジメ灰を供出した。我ら村の漁村契の組合長は海女たちに割り当てたカジメ灰を集めて旧左面事務所に差し出した。

海女たちがいかなる海産物を採取しようと水に入ることを「ムレ（물레）：水に」という。日本陸・海軍省は軍需物資確保のために1905年城山浦に「カジメ工場」を建てた。この時から済州島海女社会に「カムテムレ（감태물레）：カジメ水に」という言葉が誕生した。済州島のカジメは単なる肥料用の海草から換金価値の高い海藻類に変身した。済州島海女は単なる労働者からお金を稼ぐ職業人に変身した。済州島海女はそのお金で子供（特に息子）に教育を受けさせた。そのため済州島海女の息子の相当数は社会主義革命家に変身した。彼らのある者は済州4・3事件（1948）を主導し、ある者はその事件に参加した。済州島のカジメは済州社会を変身させる動因として作用したの

である。

#### 参考文献

高橋昇著 飯沼次郎・高橋甲四郎・宮嶋博史  
編 1998年『朝鮮半島の農法と農民』未来社  
朝鮮総督府農工商部水産局編纂 1910年『韓  
国水産誌』  
小金丸汎愛 1916年「海藻生産調査」(『朝鮮  
彙報』12月号収録)  
全羅南道済州島庁 1924年『未開の宝庫済州  
島』

#### 註

<sup>1</sup> 高橋昇(農学者 1892-1946)は総督府農  
業試験場西鮮支場長を務める。植民地時代、  
朝鮮の農法は遅れたものとされ、日本農法  
を押しつけられた。しかし、高橋昇は朝鮮  
全土を調査して歩き、朝鮮のきびしい風土  
に対応した農法について膨大な資料を残し  
た。彼の残した資料は息子高橋甲四郎によ  
って保管され、後に飯沼次郎・高橋甲四  
郎・宮嶋博史の編集によって、『朝鮮半島  
の農法と農民』として出版された。

#### 新刊紹介

### 馬場悠男著 「古人類学とは何か」

ヒトに関する学問が細分化されて、人の全  
体像が見えなくなっている。本論は、季刊  
『考古学』118号の「特集：古人類学・最新研  
究の動向ー人類の進化と拡散・日本列島人の  
形成史ー」の総括論文である。著者は、アフ  
リカで誕生した人類が、日本列島上で日本人  
になるまでの道程を最新の発掘資料、DNA解  
析などを駆使して解説、加えて自然科学と人  
文学の協業を説いている。近年、自然科学  
の進展で、考古学方面における年代測定など  
に関する論議などは目を引く。人文系研究者  
もこの方面への目配りは常に必要な状況にな  
っている。

特集では、馬場の前掲論文に続き、「人類  
の進化と拡散」と「日本列島人の形成史」の  
二部に分け論が紹介される。前者では、特に  
ラミダス猿人の人類史上における位置づけに  
ついて多くの頁が割かれている。後者の論文  
のテーマを紹介すると、「歯の特徴による日  
本人の形成とアジア太平洋の人々」(松村博  
文)、「DNAによる日本人の形成」(篠田謙一)、

「アイヌ民族とオホーツク文化人集団」(石田  
肇・増田隆一)、「沖縄・琉球人の成り立ち」  
(土井直美)、「縄文時代における環境と植生  
態の関係」(米田稔)、「徳川將軍女性親族遺  
体の“貴族形質”について」(坂上和弘・馬場  
悠男)であり、寛永寺の出土人骨から身分の  
高い女性の形質を導き、貴族化・現代化を論  
ずるなどその視角から調査法まで目が開かれ  
る。

昨年の国際常民文化研究機構のシンポジウ  
ム「カラダが語る人類文化」では、宮家準先  
生と馬場先生に基調講演をして頂いた。坂  
上・馬場先生のコンビには、昨夏、新潟県村  
上市観音寺の即身仏、仏海上人の平成の衣替  
えの折にお世話になり、自然人類学の手法の  
一端をじかに学ばせてもらった。かつては、  
総合人類学が唱えられた、今日こそ、地球上  
に住む生物の一員として、その必要が高まっ  
たのではないかと思う。(佐野賢治)

季刊『考古学』 雄山閣 2012年2月刊  
2400円